

「日清・日露」という見方について

古 結 諒 子*

1. はじめに

本発表は、歴史学で日露戦争がどのように語られていたのか、その一例として「日清・日露」という見方について簡単にとりあげる。

国際関係の転換という意味では、日清戦争は中国を中心とした華夷秩序の崩壊、通商貿易を中心に協調した列強が投資活動の開始によって競合関係へと移行する、不平等条約体制の動揺をもたらした。

いっぽう日露戦争は、日本が列強の立場を固める契機となった戦争として大きな意味を持った。ポーツマス条約によってロシアが勢力を後退させたのに対して、日本とアメリカがアジア進出を本格化させた。日本の在外公使館が大使館へと昇格したのも、日露戦後である¹。

本来、両戦争は異なる歴史的段階で生じた戦争である。しかし、通史的な叙述では日露戦争を10年前の日清戦争とあわせて「日清・日露」と表現する例がある²。これは単に日清戦争と日露戦争という両言葉を指す場合と、両戦争を一体的に連続してとらえる視点を包含する場合とがある。本発表で取り上げたいのは、両戦争をセットでとらえようとする、後者の見方のことである。

では、「日清・日露」という見方にはどのような意味があるのか。また、二つを統一的に連続して語ることによって、どのような問題があるのか。その点について述べてみたい。

2. 性格論争に伴う「日清・日露」の登場

史料状況と時代状況という二重の制約によって、太平洋戦争以前、日露戦争研究は限定的な成果しか生み出されなかった。それに比べ、日清戦争は陸奥宗光が『蹇蹇録』を残したこともあり、外交史を中心にいくつかの研究が登場した。だが、日本における日清戦争と日露戦争の研究は、昭和初年以來、戦争の性格論に集中した。そのことが、「日清・日露」という叙述方法を定着させる原動力になっていたと言えよう。

とくに、政治史研究や外交史研究の分野では、1950年代から60年代にかけて両戦争の「帝国主義的性格」の問題が重要な論点となった。両戦争の時期での日本の政治や外交の分野における帝国主義的政策と、経済の分野における資本の未成熟をいかに統一的に理解するのかという困難が伴っていたのである。当時は、性格規定そのものが、研究者の同時代に対するスタンスを左右するものであったため、論争は盛んに行われた。日露戦争が帝国主義戦争か否か、という論争は、結果的に軍事・政治的契機による帝国主義戦争であったということで、決着がついた。

ところが、この性格論争では実証的研究がなされないまま、日清戦争が帝国主義の文脈で論じられていた。日清戦争は帝国主義戦争ではないとされつつも、戦後に東アジアに帝国主義世界体制を確立させた契機として注目された。世界体制としての帝国主義化や日本帝国主義化といった、必然性を意識した形で日清戦争が語られていたのであ

*お茶の水女子大学リサーチフェロー

る³。

そして、概説書などでは「日清・日露」戦争と連続してとらえることで、欧米列強に対峙できることを目標としながら、アジア諸国に対する侵略、植民地化を行い、日本が帝国主義国家となる過程が描かれた。1880年代のアフリカ分割を終えた欧米の帝国主義世界が「日清・日露」によって、より大規模な戦争に向かって進んでいく過程や、両戦争共に朝鮮支配を目的にしていたとして、韓国併合過程と連動させて「日清・日露」が描かれたのである。しかも、両戦争を連続的に語ろうとする場合、規模の大きな日露戦争に叙述の重点が置かれた。日清戦争は日露戦争の前哨戦として取り上げられていたのである⁴。

その後、日清戦争も日露戦争もそれぞれ100周年を迎え、その研究も経済に限らず、軍事、文化、思想、メディア、民俗、宗教などに広がった。この時期になり、主に日清戦争の研究者が日露戦争とは異なる歴史的意義についての再評価を求めようになった。日本史側よりも東洋史側で関心が高い状況を受け、日露戦争とは異なる東アジアを舞台とした国際関係に基づく研究の重要性が改めて説かれたのである⁵。

ただし、個別研究が進展する一方で、現在に至るまで概説書または通史的叙述で「日清・日露」という見方は存在する。たとえば、「東アジア50年戦争」のスタートとして「日清・日露」をとらえようとするものや、日露戦争より日清戦争に叙述の力点を置くものも登場している⁶。かつてのように性格そのものを論じているわけではないが、その枠組みによる影響は残されていると言えよう。

3. 「日清・日露」にはどのような問題があったのか

では、「日清・日露」という連続した叙述方法により、どのような問題があるのか。

一つに、東アジアにおける帝国主義体制の成立

がなぜ日清戦後であったのか、タイミングの問題については答えを提供しなかった。日清戦争前ではなく戦後に中国における利権獲得競争が激化した点について、従来は、戦争による中国の弱体化、欧米各国の競争激化が意識されていた。だが、19世紀における不平等条約が植民地化を防ぐ機能を有していたものの、日清戦争後の下関条約によって中国をめぐる不平等条約が転換し、それが履行されるといった、変化をめぐる紆余曲折的過程を明らかにすることも求められよう。歴史的事実から帝国主義的性格を抽出する作業は、事実関係をどう構造的に捉えてその相互関連性を明らかにするのか、という作業とは異なる。事実関係の質的な変化を明らかにし得ないのである。

次に、列強各国の中でもロシアのプレゼンスを過度に強調した叙述であることを指摘できる。そもそも、「日清・日露」という視点の場合、19世紀東アジアの国際環境は、欧米の影響力が一方通行的に浸透していく場として設定されている。これは、日露戦争の叙述の始点（日清戦争前か、三国干渉か、義和団事件か、日英同盟か）の相違にも関係するが、日清戦争前にシベリア鉄道建設を行うロシアの動向や日清戦後の三国干渉は後の日露戦争への伏線とされた。

それに関連して、ヨーロッパの国際関係をそのまま東アジアに投影する傾向があることも指摘できる。具体的には、世界的英露対立を図式化し、そこに東アジアにおける日本を論じていた。だが、イギリスとロシアが東アジアのどのような問題において対立していたのか、問題ごとの相違と状況の変化も見落とせない。ヨーロッパ情勢と東アジア情勢がどのように影響し合っていたのか、歴史的段階ごとの相互作用それ自体の変化も、今後、課題になるだろう。

対照的に、アジア諸国の動向は十分に注目されてこなかった。たとえば、中国主導による朝鮮の「開国」である。日本史の文脈における朝鮮の「開国」は、江華島事件によって日本が締結した日朝

修好条規（1876年）に求められる。だが、朝鮮が欧米との条約を結ぶ上で重要な役割を果たしていたのは、むしろ1882年前後の中国の動向である。

また、大韓帝国の成立（1897年）もあまり注目されていない。朝鮮問題をめぐる日清間の対立は日清戦争によって決着し、下関条約の第一条によって朝鮮独立が保たれたとされる。だが、朝鮮自ら中国との関係をめぐってその後どう動いたのかという点や、それに伴う各国の姿勢の変化もまた重要であろう。

そして、日露戦後の中国の動向である。日本はポーツマス条約、北京条約で南満州の特殊権益をロシア、中国から獲得した。そのため、戦後にはそれをロシア・中国双方から守らなければならない状況となった。日清戦後と異なり、日露戦後には、中国が鉄道の建設・経営の主体となることを主張するようになっていく。日本は多国間協商網を構築していくことで経済利権の確保や政治的発言権をめぐって各国との共同歩調をとっていきが、それは、中国のナショナリズムの台頭や、政治状況の流動化に対応する側面があった。

まとめ

総じて、両戦争を連続して語る場合には、歴史の同時代的観点よりも、むしろ必然性が重視されていた。「日清・日露」には、20世紀を語るための19世紀が語られているのである。

<参考文献>

- 井上清『日本帝国主義の形成』（岩波書店、1968年）
大谷正「日清戦争」（明治維新史学会編『講座明治維新5 立憲制と帝国への道』有志舎、2012年）
煙山専太郎「日清日露の役」（『岩波講座日本歴史』第9、岩波書店、1934年）
小風秀雅「アジアの帝国国家」（小風秀雅編『アジアの帝国国家』吉川弘文館、2004年）
下村富士男「日清・日露戦争」（『日本歴史』147、1960年）
信夫清三郎・中山治一編『日露戦争史の研究』（河出

- 書房新社、1972年、初版は1959年）
千葉功『旧外交の形成—日本外交1900～1919—』（勁草書房、2008年）
藤村道生『日清戦争—東アジア近代史の転換点—』（岩波書店、1973年）
日本国際政治学会編『国際政治19、日本外交史研究—日清・日露戦争—』1962年
東アジア近代史学会編『日清戦争と東アジア世界の変容』上・下、ゆまに書房、1997年）
東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』（ゆまに書房、2008年）

注

- 1 小風秀雅「日清戦争と20世紀の世界秩序」（小風秀雅編『近代日本と国際社会』（放送大学教育振興会、2004年）を参照。
- 2 大谷正『日清戦争』（中央公論新社、2014年）「はじめに」を参照。この語り方に対する疑問は、主に、日清戦争の研究者から投げかけられる。
- 3 以上、小木曾照行、桜井敏照、藤村道生、義井博「日清・日露戦争の研究史」（『国際政治』19、1962年）。千葉功「日露戦前期（1900～04年）外交史研究の現状」（『史学雑誌』106・8、1997年）。同「日露戦争研究の現状と課題」（『歴史評論』669、2006年）などを参照。
- 4 宇野俊一『日本の歴史26 日清・日露』（小学館、1976年）、井口和起「日清・日露戦争論」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』第8巻、東京大学出版会、1985年、のち『日本帝国主義の形成と東アジア』名著刊行会、2000年所収）、海野福寿『日本の歴史18 日清・日露戦争』（集英社、1992年）などを参照。
- 5 檜山幸夫「日清戦争の歴史的位罫」（『日清戦争と東アジア世界の変容』上、ゆまに書房、1997年）を参照。
- 6 原朗『日清・日露戦争をどう見るか—近代日本と朝鮮半島・中国』（NHK出版、2014年）。原田敬一『シリーズ日本近現代史③日清・日露戦争』（岩波書店、2007年）。